

ラフカディオ・ハーンのイギリス時代再考

～イギリス時代の記憶をハーン文学に辿る～

那須野 絢 子

Ayako NASUNO. Reestablishment of Lafcadio Hearn's English Days. *Studies in International Relations* Vol.38, No.1. October 2017. pp.25-34.

Lafcadio Hearn (1850-1904) was born in Greece and spent his childhood in Ireland and England. Via America, as his next destination, he came to Japan in the Meiji Era. He loved Japan and wrote Japan-related books to introduce Japanese culture to Western people.

Aside from his love of Japan read in his literature, there are hints of western philosophy at the bottom of his works. Researches so far have been mainly focused on the connection between his childhood in Greek and Ireland, or the tie between Hearn and England has been neglected. This is partly because Hearn's English days are generally described as his unhappiest days in his life and his sorrow rooted in those days kept him from telling about his childhood in England.

With regard to my study, the influence of his English days on his literature is well recognized and verified along with that of his Greek days and Irish days.

I collected his memories in England described in his literature and considered how he had assimilated them into his writings. Consequently, I am convinced that Hearn's English days played a vital role in making his literature a fusion of the Occident and the Orient.

1. 序 ハーン研究における空白の時代

ラフカディオ・ハーンは、1890年、ニューヨークの出版社と契約したルポライターとして来日した。しかし、到着早々、金銭面のトラブルで、契約を破棄、その後は英語・英文学教師として教鞭を執りつつ、日本を西洋へ紹介する著作を、亡くなるまで書き続けた人物である。

ハーンの辿った人生の軌跡は、決して平坦なものではなく、特に、執筆家として成功する以前のヨーロッパ時代は、様々な困難が降り注いだ波乱の時期であった。多感な子ども時代の様々な記憶と経験は、その後の彼の人生を大きく左右し、次第にハーン文学の中に根を下ろしていくことになる。

ハーンのヨーロッパ時代は、誕生から2歳までのギリシア時代、2歳から13歳までのアイルランド時代、13歳から19歳で渡米するまでのイギリス時代に区分される。これまでの先行研究を精査す

ると、上段落最後に記した、「ハーン文学に根を下ろした幼少期の記憶と体験」、つまり、ハーン文学の中に見られる幼少期の影響は、大多数がギリシア時代及びアイルランド時代と結びつけられて論じられているのが現状である。残るイギリス時代に関する研究は実に希薄であり、主なものとしては、平川祐弘氏の「ハーンのロンドン体験¹⁾」、池田雅之氏の『ラフカディオ・ハーンの日本』に収録された「ウショー校での痛ましき受難」、現地調査を実施し執筆された西野影史郎氏の『IrelandとEnglandにおけるLafcadio Hearn: Ushaw 校生活前後の事情²⁾」他、研究論文ではないが、N.H.ケナードのハーン伝『ラフカディオ・ハーン』などが挙げられる。ケナードの伝記は賛否両論あるが、ハーンの生涯を客観的にまとめた第一のものであり、アショーカレッジでの学生生活を中心に、イギリス時代に割かれた頁も後に発表された伝記と比較すると多い。学友へのインタビューなどの新資料を取り入れつつイギリス時代のハーンの実像

に迫り、この時代が将来のハーンに与えた影響を筆者なりにまとめている当文献は、ハーンのイギリス時代を知る上で最も重要な資料ともいえる。

しかし、ケナードの伝記は、ハーン没後間もない1911年に出版されたものである。以降100年以上の歳月が流れた現在に至るまで、多くの研究者によってハーン研究が進められてきたことを考えると、それらの先行研究を参考にしながら、これまで空白になっていた、文学者ハーンと彼のイギリス時代との関係を論じることもできるのではないか。

梅本順子氏は著書『浦島コンプレックス』において、「ハーンは、異文化により受け入れたものを手段として、心の奥底で半ば潜在していた過去を捜し出し、昇華する作業を繰り返した³。」と記している。ここで梅本氏の言う「心の奥底で潜在していた過去」とは、ヨーロッパでの幼少時代のことであり、「過去を探し出し、昇華する作業」とは、彼が生業とした作家、文学者としての活動を指す。晩年に向かうにつれて、ハーンの文学活動は、過去の記憶を拾い出す西洋回帰的な側面を帯びる傾向にある。つまり、ヨーロッパを離れた当初は顧みることが疎まれた幼少期の記憶を、文学の中に散りばめていくことにより、彼は自身のアイデンティティを再確認していったのである。

そこで本論考では、アショーカーレッジでの学生時代を中心に、ハーン研究の空白期ともいえるイギリス時代の記憶が、彼の文学活動の中でどのように昇華されたのかを考察する。

2. アショーカーレッジでの学校教育

ハーンのイギリス時代は、イングランド北東の町ダラム近郊の神学校アショーカーレッジへの入学から始まる。両親の離婚後、ハーンの養育者となっていた大叔母サラ・ブレナンとともに、ダブリンより移住し、遠縁の住むロンドン近郊のレッドヒルを拠点として、彼はこの寄宿学校へ送られた。1863年9月9日に入学し、大叔母の経済的事情で1867年10月28日に同校を退学するまで、約4年間に及ぶ学生生活を彼はこの学校で送ったのである。

ハーンのアショーカーレッジ時代を種々の文献で一瞥しようとする、左眼の失明や大叔母の破産による強制退学など、連続する不幸な出来事の記述の他、この学校での神学教育が、後の彼のキリスト教嫌いの一因となった、といったネガティブな側面のみが浮かび上がってくる。しかし、ハーンが生涯で受けた唯一の学校教育期間であるこの4年間を、「不幸の時代であった」という一言で済ませてよいものであろうか。そこで以下より、当時のアショーカーレッジがハーンに施した教育と同校でのハーンの学校生活から、その価値について考察した。

アショーカーレッジはフランス、ドゥエーに創設されたイングリッシュ・カレッジに端を発する。しかし、フランス革命の影響下で当地からの撤退を余儀なくされると、学者たちがイングランド北東に位置するダラム近郊のアショームーアに彼らの学校を再建した⁴。これが1808年に開校したアショーカーレッジである。(当時はセント・カスバート・カレッジという名で始まった。なお、同カレッジは2011年に教育機関としては役目を終えたが、現在では、展示会や様々なイベントを開催しながら、広く一般公開されている。)

同校の歴史本を紐解くと、開校当時より、Pitch Between Heaven and Charing Cross という教育理念を掲げ、一般の学生(lay)も聖職者希望者(clerical)も同じ環境のもとで学校生活が営まれていたと記されている⁵。このような教育方針は、当時のイギリスにおける神学校の形態としては大変珍しいものであった。さらに、聖職者を志す者のみではなく、カトリック教徒自体により高度な教育を身に付けさせることを目的に、神学のみではなく様々な学問教育が施され、1840年にはヴィクトリア女王より学位の授与も認められている⁶。

では、上記のような教育機関におけるハーンの学業面での学校生活はどのようなものであったのだろうか。2015年9月、幸運にもアショーカーレッジを訪問する機会を得ることが出来、いくらかの現存するハーン関連資料を入手することができたため、ここで紹介したい。

まずは、ハーンのアカデミックスコアである。アショーカーレッジには、これまで在籍していた生

徒の成績表が大型本に収められて残っており、その記録によると、ハーンは1863年から1867年まで、12期にわたり、ラテン語、フランス語、英語、数学、ギリシア語の授業を受けていた。各記録を撮影した写真をすべて掲載することは出来ないで、一覧にしまとめたものを下記に添付した。

(表-1 アショーカレッジ時代のハーンの成績一覧表)

| Patrick Lafcadio Hearn academic results | | | | | | |
|---|-------|--------|---------|------------|-------|---------------------------|
| | Latin | French | English | Arithmetic | Greek | |
| Christmas 1863 | 25/31 | 4/31 | 1/31 | 24/31 | | First Class of Elements |
| Easter 1864 | 29/31 | 21/31 | 1/31 | 22/31 | | |
| Summer 1864 | 27/32 | 12/32 | 3/31 | 22/32 | | |
| Christmas 1864 | 6/15 | 5/14 | 1/15 | 11/15 | | Second Class of Rudiments |
| Easter 1865 | 10/15 | 8/15 | 9/15 | 13/15 | | |
| Summer 1865 | 8/14 | 2/14 | 1/14 | 10/14 | | |
| Christmas 1865 | 6/18 | 3/18 | 1/18 | 16/18 | 12/15 | First Class of Rudiments |
| Easter 1866 | 9/18 | 4/18 | 1/18 | 18/18 | 11/16 | |
| Summer 1866 | 9/20 | 12/20 | 1/20 | 15/20 | 16/17 | |
| Christmas 1866 | 15/15 | 9/15 | 1/15 | 13/14 | 12/16 | Fourth Class of Humanity |
| Easter 1867 | 9/15 | | 1/15 | 15/15 | 12/15 | |
| Summer 1867 | 8/15 | 7/15 | 2/15 | 15/15 | 7/15 | |

大雑把にその傾向を記すと、英語、フランス語においては、ほとんどの学期でトップクラス、特に英語においては7割以上クラスで1番を取っている。ラテン語、数学、ギリシア語においては、ほぼ下位クラス、特に数学においては最下位を3回も取っている上、最下位クラスを一度も脱していない。将来、作家、英文学者、フランス文学翻訳家として名を馳せる文学者ラフカディオ・ハーンの片鱗をうかがわせる成績表である。言い換えれば、ハーンはこの学生時代に、将来の生業となる文学の素養を見出したともいえる。ハーンがアメリカ時代の友人であるテュニソンに対して、それを裏付ける以下のような証言をしていることを、ケナードは伝記の中で記している。

Later, at Cincinnati, Lafcadio told his friend Mr. Tunison that he remembered, as a boy, being given prize for English Literature and feeling such a very little fellow, when he got up before the whole school to receive it⁷.

また、訪問の際、アショーカレッジより頂いた1904年（ハーン没年）出版の *The Ushaw Magazine* vol.41の中に、ハーンの文才に関する以下のような学友の証言を発見した。

But the reputation Patrick Lafcadio Hearn then enjoyed amongst his peers as an English writer remained impressed on his mind, and when, many years after, books appeared written by a Hearn, he began to suspect that the author of such fascinating books in faultless English was the Hearn of his earliest Ushaw days⁸.

学生時代に取得した成績や、上記に抜粋した資料から判断すると、アショーカレッジでの教育は、ハーンにとって、文学の魅力や文才を発見させる契機となったといえる。

そして、伝記の中でケナードが記している、左眼の失明という不幸が襲いかかる以前のハーンが、カレッジ生活の中に、つかの間の平穏な幸せを感じていたことに関しても、とりわけ注目する必要がある。序章で述べたとおり、ケナードは、ハーンの評伝を執筆するにあたり、当時まだ存命していたハーンの学友3人の直接インタビューを試みている。彼らは、ハーンと特に親しかった人物であったと思われるだけに、その具体的な思い出をケナードに語っている。学友らの証言からも、ハーンがすでに並はずれた文才があったことが見て取れる他、友人たちと文学について語らうハーンの姿がイメージすらできる内容である。以下はケナードが第4章の冒頭に添えた、ハーンが後に友人に送ったとされる書簡の抜粋である。

Really there is nothing quite so holy as a College friendship. Two lads, absolutely innocent of everything in the world or in life, living in ideals of duty and dreams of future miracles, and telling each other all their troubles, and bracing each other up. I had a such a friend once, we were both about fifteen when separated. Our friendship began with a fight, of which I got the worst; then my friend became for me a sort of ideal which still lives. I should be almost afraid to ask where he is now (men grow away from each other so): but your letter brought his voice and face back — just as if his ghost had come in to lay on my shoulder⁹.

幼い頃にふれていたケルトの妖精譚やギリシア神話を異端とするカレッジでのキリスト教教育に反発を抱いたといわれているハーンであるが、そのカレッジ生活自体が苦痛の日々ではなかったことをこの内容は証明している。

ハーンは渡米後、独学で文学を学んだと多くの文献に記されているが、この章で示した資料を考慮すると、アショーカーレッジでの教育は、ハーンに英文学に触れる機会を与え、文学者となる最初の指針を示したものであつといえる。そんなハーンは、東京帝国大学での英文学講義の中で以下のようにこの時期の記憶の断片を語っている。

I read *The Heroes* first at the age of thirteen, — in an great hurry in a rail way carriage; I bought it at a railway bookstall, on my way home from school¹⁰.

13歳と記されていることから、おそらく、カレッジ入学後の最初のクリスマス休暇の時期の記憶ではないだろうか。授業で扱われたと思われる時の文豪チャールズ・キングスリーの作品を一早く読もうと、駅の売店で本を買うハーン少年の姿が目浮かぶ一節である。

以上のように、アショーカーレッジでの教育経験は、後の英文学者ハーンの種となり、アメリカでのジャーナリスト生活の中でその芽は育まれ、来日後、東京帝国大学及び早稲田大学における英文学講師としてのキャリアの中で花を開かせ、多くの学生を魅了した名講義として昇華されていったのである。

3. ハーン作品にみられるマリア崇敬

前章においても記したとおり、アショーカーレッジはローマ・カトリックの神学校である。そして、ここでの神学教育は、将来ハーンの中に芽生えるキリスト教嫌いの種を植え付ける一つの契機であったという理解は、現在のハーン研究においては通説となっている。多神教の神話的な世界を好む傾向にあったハーンが、それらを異端とするキリスト教に対して反発心を抱いたことは自然の成り行

きであろう。しかし続くこの章では、ハーン文学に現れた反キリスト教の側面ではなく、ローマ・カトリックの「マリア崇敬」に焦点を当て、彼の文学にみられるカレッジ時代の影響を考察していく。

まず初めに、幼いハーンが初めて聖母マリアの存在を知った時の記憶と思われる、自伝的作品「私の守護天使」の一節を紹介したい。

To the wall of the room in which I slept there was suspended a Greek icon- a miniature painting in oil of the Virgin and Child, warmly colored, and protected by a casing of fine metal that left exposed only the olive-brown faces and hands and feet of the figure. But I fancied that the brown Virgin represented my mother — whom I had almost completely forgotten — and the large-eyed Child, myself¹¹.

ここで記されているとおり、ハーンは幼い頃、ダブリンの屋敷の子ども部屋にかけられていたギリシアイコンの聖母子像を、生き別れた母と自身の肖像であると勘違いをした。つまりこの時、聖母マリアは、母の幻影として幼いハーンの中でイメージ化されたのである。このことは、平川祐弘氏の、ハーンと母の関係性を論じた論考においても以下のように指摘されている。

The motherless child, therefore, longed for that tender relationship existing between the Virgin and the Child, and that longing was something fundamental throughout Lafcadio Hearn's life. As a child, he sought his mother in that image; he harboured a secret desire to be babies: the idea mother-child relationship was represented, therefore, in the Greek icon.

If Hearn felt extremely lonely in the United States, one reason must be that there is no Mary cult in that essentially Protestant country¹².

アショーカーレッジの正門から校舎の中に足を踏み入れると、まず初めに目に飛び込んでくるのが、

幼いイエス・キリストが聖母マリアの胸に抱かれた聖母子像である。



（写真-1 アショーカレッジ エントランスホールに在る聖母子像）

O.W.フロストは、ハーン伝『若き日のラフカディオ・ハーン』の中で、大叔母と従兄がアショーカレッジのハーンを訪問した際に、ハーンが国教会信者であった従兄に対して、聖母像への敬礼を指示したというエピソードを記している¹³。ダブリン時代、聖母子像の中に母の幻影をみたハーンが、アショーカレッジのそれを前に、特別な感情を抱かずにはいられなかったことは容易に察しが付く。このエピソードの光景は、おそらくエントランス広場に置かれた（写真-1）の像の前で繰り広げられたのではないだろうか。カレッジ内には、その他にも美しい聖母や聖母子の像が所々に置かれていた。少年時代のハーンは、これらの像を見る度に、幼いハーンを優しく抱く生き別れた母のイメージを心に思い描いたに違いない。

ハーンは自身の作品において実に多くの女性を登場人物に添えているが、そこにギリシア人の母親のイメージが投影されていることはこれまでの先行研究で明らかになっている。そうであるならば、上述したようなローマ・カトリック体験を経たハーン作品の女性には、聖母のイメージが投影されたものもあるはずである。そこで下記より、いくつかの作品を材料にして、それらのイメージを考察していく。

まず初めに、1889年に発表されたハーン初の小説『チータ』を取り上げる。この物語は、ハリケーンによる嵐で浜辺に流れついた主人公チータを、カルメンという女性が乳母となり育てる物語であ

る。チータと出会う前夜、カルメンは、聖母が自分に幼子を託す夢を見る。以下はその一節である。

And before her, even as she prayed her dream-prayer, the waxen Virgin became tall as a woman, and taller, — rising to the roof and smiling as she grew. Then Carmen would have cried out for fear, but that something smothered her voice, — paralyzed her tongue. And the Virgin silently stooped above her, and placed in her arms the Child, — the brown Child with the Indian face¹⁴.

この夢で暗示されたとおり、彼女は翌日、浜辺に流れてきた幼い少女を見つける。その子どもは、母親の死骸に絹のスカーフでしっかりと結わえ付けられていた。カルメンの夢から引き継がれるこの母子のイメージは、まさに、幼子イエスを胸に抱いた聖母子像とオーバーラップする。

『チータ』に続いて発表された小説『ユーマ』においても、読者に聖母子像を彷彿とさせるイメージが描写された個所がある。この作品は、白人家庭に乳母として雇われた黒人奴隷のユーマが、自分の命を犠牲にして、雇い主の子であるマヨットを守ろうとする母性愛を描いた物語である。かのシーンは、物語の最後、奴隷蜂起の戦火の中、ユーマがマヨットを抱きかかえ亡くなる激的な最終場面に以下の様に描写されている。

Youma drew off her foulard of yellow silk, and wrapped it about the head of the child: then began to caress her with calm tenderness, — murmuring to her, — swaying her softly in her arm, — all placidly, as through lulling her to sleep¹⁵.

実際に作中では、この光景を傍らで見ていた恋人のガブリエルが、マヨットを抱くユーマを、“the figure of Norte Dame du Bon Port”（良き港の守りの聖母）の様だと感じたことが記されており¹⁶、母親に抱かれたチータ同様、ここでも、聖母子像のイメージとして、ユーマとマヨットのワンシーンが描かれていることがわかる。

上記のとおり、『チータ』及び『ユーマ』に現れ

た聖母子のイメージは共に、母に抱かれた子とその子を守りながら亡くなった母であったが、日本時代のハーンの怪談にも、これと類似した母子像が描かれた作品がある。それが「神々の国の首都」(『知られざる面影』収録)に紹介された「水あめを買う女」の話である。

この物語は、松江時代のハーンが当地で取材した説話である。夜になると決まって水あめを買いに来る女がおり、ある日あめ屋が不思議に思って女の後をつけてみると、墓地の中のある墓石の前でかき消えた。あめ屋がその墓を開けてみると、そこには、まだ生まれたばかりの生きた赤子と、その傍らには水あめを買いにきた女の死体が横たわっていた。女は、墓の中で生まれた子どもを、死してなお水あめを与えて育てていたのである。「母の愛は死よりも強し」という言葉で結ばれたハーンの再話の最終場面からは、史上最高の母性の具現ともいえる聖母のイメージを感じずにはいられない。

以上ここで取り上げた3つの作品に登場する母子は、いずれも共通して、母は死ぬ、もしくは死ぬ運命にあり、物語は、母(『ユーマ』では乳母)と子の別離のストーリーとなっている。これは、幼い頃に母親と生き別れたハーン自身の運命が投影された結果だといえる。つまり、彼は母ローザとの生き別れを、「死」という文学的モチーフに転換させ、作品の中に表現したのである。そしてもう一つの共通点として挙げられるのが、紹介したそれぞれのシーンが、「子を抱く母」「子に寄り添う母」という読者の視覚に訴える一つの“イメージ”として描写されていることである。これは、ダブリンの大叔母宅で見たイコンの聖母子像や、アショーカレッジ時代に崇敬した校内の聖母子像(写真-2参照)のイメージと深く関わり合っている。

「ハーンの祖先は元々、イングランドのノーサンバランドからやってきたと言われており、ハーン家の人々は代々国の支援を受けた英国国教会の教徒として、自分たちをアイルランド人よりもイングランド人と考えていた」とO.W.フロストは伝記の中で記している¹⁷。このことから、ハーンはアイルランドというカトリック国にしながら、聖母のイメージに触れる機会が少なかったのではないかと推測できる。それが、結婚して国教会からカ



(写真-2 アショーカレッジ内の聖母子像/
写真アショーカレッジ提供)

トリックへと帰依した大叔母に引き取られることにより、「私の守護天使」で綴られたような聖母子のイコンと出会い、さらには、カトリックの神学校であるアショーカレッジへ進学し(子供のいなかった大叔母はハーンを自身の後継者とするためにカトリックの神学校へ入学させた)、そこでの生活を経ることにより、聖母=母のイメージがより強く彼の中に刻まれていったのである。つまり、同章で取り上げた物語に映し出された母子のイメージは、アショーカレッジでの記憶の断片が少なからず作用し、作品に投影されたものといえるのである。

4. 挫折と苦悩 — 失明・父の死・親戚との別離

2章、3章において、ハーンのアショーカレッジでの生活には、学友に恵まれながら、大好きな文学に触れる機会を得ることのできる空間と、母ローザを思い出させる聖母像の存在により、両親と生き別れたアイルランド時代の孤独感を癒す時間が存在したことがわかった。しかし、1866年、カレッジ入学3年目の年に、その平穏な生活が打ち破られる出来事が起こる。ハーンは友人と遊んでいる最中に左目を負傷し、失明に至る大けがを負うのである。この事故以来、彼は写真を撮る際には、白濁して醜くなった左目を隠すように左向きで映るようになった。また、明るくいたずら好きであった性格も一変した。怪我をした目のせいで、ハーンは徐々に人と向き合うことを恐れるように

なっていたのである。そこに追い打ちをかけるかのように、不幸が相次いで襲いかかる。左目失明直後、軍医として勤務中であった父チャールズが、マラリアに侵され亡くなったという知らせを受け取り、更に、5年目の新たな学期を迎えたその翌月、ハーンは大叔母の破産により、アショーカレッジの退学を余儀なくされるのである。

フロストの伝記によると、カレッジでの最後の夏休暇には、ハーンはレッドヒルの大叔母の家には帰らず、一人寄宿舎で過ごしていたと記されている¹⁸。この時すでに、大叔母の経済状況は悪化しており、レッドヒルの親戚たちは、帰省したハーンを快く迎え入れることのできない状況に陥っていたのであろう。このように、アショーカレッジでの束の間の安らぎの空間は、儚くも消え失せ、その後ハーンは、かつて味わったことのない苦しみの月日を経験することとなる。

大叔母は、学校を退学したハーンを養育できる状態ではなかった。そのため、一人アイルランド時代の乳母を頼ってロンドンへ行き、アメリカへ出発するまでの約2年間、彼は浮浪者のごとくイーストエンドをさまよっていたといわれている。この時期の彼の軌跡を示す十分な資料が残っていないため不明瞭な部分が多いが、後にハーン自身が断片的に友人や教え子に語った回想や、ハーンがいた当時のロンドンの社会状況から、その実態をある程度推測することはできる。以下にロンドン時代の記憶が語られた2つの資料を紹介する。

① 友人W.B.メイソンへの書簡（1892.11）

I have just read that most frighten book by Kipling, "The Light that Failed," where he speaks of the horror of being in London without money. Nobody can even dimly image — no, not with a forty horse-power imagination — what the horror is, if he hasn't been there¹⁹.

② 帝大の教え子茨木清次郎への書簡（1902.7.8）

Your letter has set me to thinking of my own boy-existence in London. I was rich there and poor. At fourteen or fifteen I live in the West End, and played with nice lads. At

seventeen I found myself very poor and without prospects in London: then I live near the old Blackfriars' Bridge, and passed my lonesome days nights in long walks by the Thames Embarkment²⁰.

長島伸一氏は著書『大英帝国 最盛期のイギリス社会史』において、19世紀後半のイギリスにおける労働者階級の実態を、「ヴィクトリア朝期のイギリス社会は、貧困のあいだが埋めようもない深い溝で分けられていた時代であった。とりわけ、労働によってみずからの生活の糧を得ている厚い階層のうち、ぎりぎり暮らししている貧困世帯は、世の繁栄に取り残され、周囲をとりまく貧弱な環境に身を委ねる以外に方法はなかった²¹。」と記している。また、長島氏は、同著書において、ナイチンゲールの『看護覚書』の中から、「世界的な大都市ロンドンの東地区（イーストエンド）は、最も人口密度が高く最も不潔な地区でありまた、空気汚染をもたらす工場が立ち並ぶロンドンの公害地区であった²²。」という一節を引用し、ハーンが過ごしたであろう時代のロンドンにおける労働者階級居住地区が如何に劣悪な生活環境であったかを強調している。

以上の資料から、両親がいる家庭には恵まれなかったものの、温かな寝床、十分な食事、一流機関での教育を与えられていたハーン的生活は、アショーカレッジの退学により終止符を打たれたと考えることが出来る。上に挙げた①のメイソン宛書簡を読み進めると、ハーンは人生におけるお金の重要性を長々と綴っており、ロンドンでの貧困体験がトラウマとなっていることがわかる。

父親が亡くなり、養育者であった大叔母にも見放され、左眼の傷を抱えながら送ったロンドン時代が、ハーンにとってこれまで味わったことのない苦しみの日々であったことは間違いない。イギリスを去ってからは、仕事や家庭にも恵まれ、彼の生活は徐々に好転していくことを考えれば、54年のハーンの人生の中でこのロンドン時代は、最も不幸な時期であったといえる。

ではハーンはこの時期の苦しみの記憶を、後の人生において受入れ、文学活動の中で昇華させることができたのだろうか。ここで、彼が自身の作

品の中でロンドン時代の記憶を綴った唯一のものと思われる「門つけ」(『心』収録)より、以下の一節を分析してみたい。

One summer evening, twenty-five years ago, in a London park, I heard a girl say “Good-night” to somebody passing by. Nothing but those two little words — “Good-night.” Who she was I do not know: I never even saw her face; and I never heard that voice again. But still, after the passing of one hundred seasons, the memory of her “Good-night” bring a double thrill incomprehensible of pleasure and pain, — pain and pleasure, doubtless, not of me, not of my own existence, but of pre-existences and dead suns²³.

天涯孤独の身となった少年ハーンが、大都会ロンドンの公園に一人佇む光景を鮮明にイメージできる文章である。誰一人として彼の存在に気を留めることのない雑踏の中でふと耳にした「おやすみ」という少女の声に、ハーンはなんとも言い難い喜び (pleasure) と痛み (pain) の感覚を感じ取り、それは長い年月を経た今でも忘れられない声であることが綴られている。結論から述べると、ここで綴られた体験こそが、後にイギリス時代の負の記憶の昇華へとハーンを導く重要なモチーフとなるものであり、その昇華の瞬間が、晩年の傑作「焼津にて」(『霊の日本』収録)の中に描かれていることを発見した。このことを証明するために、これより、同作品の最終章を考察する。

焼津とは、静岡県中部の港町焼津町 (現焼津市) のことであり、ハーンはこの地の海での遊泳を好み、6度の夏を当地で過ごしている。ここでの日々は、執筆と講義で忙殺される日常からハーンを心身ともに解き放つものであったが、同地には作家としての靈感を奮いたたせる格好の材料も存在した。それが、駿河湾の荒海である。ハーンは「焼津にて」において、焼津の岸に寄せる波の轟の中に、「人に知られた恐怖のありとあらゆる音」を聞き取ったことを記している。ここで、作中に描かれたこれらの音と、同章はじめに紹介した、アショーカレッジ時代の親友 Achilles Daunt への書

簡にハーンが語った、ロンドン時代に聞いた恐怖の音の描写を比較してみたい。(アショーカレッジを去った後もハーンは Achilles に度々書簡を送っていた。これらの書簡の全容は残念ながら現段階では確認することができないが、ケナードの伝記や、Achilles がハーンとの思い出を語ったイギリスの新聞紙内のコラムにおいてその内容は断片的に綴られている。今回はイギリスの *T.P's Weekly* 1905年7月28日に掲載された Achilles による記事 “LAFCADIO HEARN. Recollection of “Paddy” Hearn at College” から引用する。)

① *T.P's Weekly* 1905年7月28日

In a letter received from him (Hearn) while living in that dreadful places (London), he described the sights and sounds of horror which even there preferred the shade of night — of windows thrown violently open, or shattered to pieces, shrieks of agony, or cries of murder, followed by a heavy plunge in the river.

② 「焼津にて」

For as I listened to that wild tide of the Suruga coast, I could distinguish nearly every sound of fear known to man: not merely noises of battle tremendous, — of interminable volleying, — of immeasurable charging, — but the roaring of beasts, the crackling and hissing of fire, the rumbling of earthquake, the thunder of ruin, and, above all these, a clamor continual as of shrieks and smothered shoutings, — the Voices that are said to be the voices of the drowned²⁴.

前に記した「門つけ」の一節からもわかるとおり、極度の近眼の上、アショーカレッジ在学中に左目の視覚をも失ったハーンは、自然と聴力が研ぎ澄まされ、耳が捉えるすべての音が何らかの意味を持って、彼の心に木霊するような節があった。①と②を比較すると、極めて類似した恐怖の音色 (①では sound of horror, ②では sound of fear とそ

れぞれ記している。)が描写されており、このことは、焼津の海の音の中に、苦しみのロンドン時代に聞いた恐怖の響きを彼が聞き取ったことを暗示する。そしてハーンは、続く「焼津にて」最終章最終部において、その苦しみや恐怖の音色が如何なるものであるかの悟りに達し、以下のように述べている。

Pleasure and pain: they commingle always in great music; and therefore it is that music can move us more profoundly than the voice of ocean or than any other voice can do. But in music's larger utterance it is ever the sorrow that makes the undertone, — the surf-mutter of the Sea of Soul....²⁵

ハーンがここで“pleasure and pain”という言葉を使っていることは、現在論じている「焼津にて」の最終章が、彼の人生において最も辛い時期であったロンドン時代と呼応していることを証明する叙述である。ハーンはpleasure and painの感覚を、偉大な音楽の中に必ず存在しなければならない相反する音響ととらえ、その低音部をなすものが、海の声の中に響く悲しみの音なのだと思えるのである。そして、さらにそれを、人間の人生に置き換え、以下のように続け、同作品は完結する。

Somewhere it is said that human life is the music of Gods, — that its sobs and laughter, its songs and shrieks and orisons, its outcries of delight and of despair, rise never to the hearing of the Immortals but as a perfect harmony.

Wherefore they could not desire to hush the tones of pain: it would spoil their music! The combination, without the agony-tones, would prove a discord unendurable to ears divine²⁶.

ハーンは、その文学性からもわかるとおり、人間の魂についてひたすら考え続けた作家であり、彼の観察眼は、常に個人レベルの生の営みではなく、連綿と続いてゆく民族や魂の記憶に向けられていた。そんなハーンが、ここで人間個人の人生

を語ったことは見逃すことのできない変化としてとらえなければならない。「門つけ」を執筆した時点でハーンはまだ、少女の声の“pleasure and pain”の響きが、彼個人の記憶から生み出される感覚ではなく、幾世代もの過去の霊の記憶に起因すると語っている。しかし、「焼津にて」最終章において、彼は少女の声の中に聞いたものと同じ感覚を、個人の人生つまり、自分自身の過去の記憶と結び付けたのである。

「焼津にて」最終章でハーンが描いてみせた、「門つけ」と比較した際のこの大きな転換を、同章でいくつかの資料と共に考察してきたハーンのイギリス時代を以って理解したとき、以下のように結論づけることができる。

イギリスにおける苦しみ、悲しみ、恐怖の記憶は、焼津の海の音により再び呼び醒まされ、海のざわめきが発する悲しみの音響こそが偉大な音楽における低音部だと悟ったハーンは、当時の挫折、苦悩、孤独の苦しみを、自身の人生における重要な低音部であると認識し、愛すべき人生の一部として受け入れることができたのである。つまり、ハーンは、イギリスで体験した人生最大の苦悩の記憶を、「焼津にて」最終章の執筆によって昇華した、言い換えれば、イギリスでの苦悩の記憶を昇華する作業として、「焼津にて」の最終章を執筆したのである。

注

- 1 文芸春秋『諸君9月号』1987に収録。
- 2 鳥羽商船高等専門学校紀要 第7号収録。
- 3 梅本順子『浦島コンプレックス』南雲堂 2000 p.125
- 4 Rev David Milburn, *Ushaw College A Celebration*, The Charlesworth Group, 2008, pp.3-17.
- 5 Rev Peter Phillip, *Ushaw College A Celebration*, The Charlesworth Group, 2008, pp.80-81.
- 6 *Ibid.*, pp81-82.
- 7 N.H.Kennerd, *Lafcadio Hearn*, Eveleigh Nash, 1912, p.62.
- 8 *The Ushaw Magazine No.42*, Ushaw College, 1904, p.297.

- 9 N.H.Kennerd, *Lafcadio Hearn*, Eveleigh Nash, 1912, p.56.
- 10 Lafcadio Hearn, *A History of English Literature*, The Hokuseido Press, 1958, p.666.
- 11 Lafcadio Hearn, “My Guardian Angel”, *The Writing of Lafcadio Hearn vol,XIII*, Rinsen Book, 1988, p.16.
- 12 Sukehiro Hirakawa, “What Dose His Greek Mother Mean to Hearn, the Japanese Interpreter”, *Lafcadio Hearn in International Perspectives*, Global Oriental, 2007, pp.26-27.
- 13 O.W.Frost, *Young Hearn*, The Hokuseido Press, 1958, p.57.
- 14 Lafcadio Hearn, *Chita*, Harper&Brother, 1899, pp.75-76.
- 15 Lafcadio Hearn, *Youma*, Yushodo, 1981, p.191.
- 16 *Ibid.*, p.191.
- 17 O.W.Frost, *Young Hearn*, The Hokuseido Press, 1958, p.1.
- 18 *Ibid.*, p.64.
- 19 E.Bisland, *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*, Rinsen Book, 1988, pp.434-435.
- 20 島根大学附属図書館小泉八雲編集委員会, 島根大学ラフカディオ・ハーン研究会共編『教育者ラフカディオ・ハーンの世界(有)ワン・ライン 2006』 p.274
- 21 長島伸一『大英帝国 最盛期のイギリスの社会史』講談社1989 pp.56-47
- 22 *Ibid.*, p55.
- 23 Lafcadio Hearn, “A Street Singer”, *Kokoro*, Charles E.Tuttle Co., 1996, pp.45-46.
- 24 Lafcadio Hearn, “At Yaidzu,” In *Ghostly Japan*, Charles E.Tuttle Co., 1971, p.238.
- 25 *Ibid.*, p.240.
- 26 *Ibid.*, pp.240-241.